

レッド・ツェッペリンのユーモア、鑑賞における情動と知覚

源河 亨 (Tohru Genka)

慶應義塾大学

ユーモアをもつ典型例はジョークだろう。その場合、発話の内容がユーモアに貢献している。では、発話以外のものはどのようにユーモアをもつのだろうか。たとえば音楽はどうか。歌詞はジョークと同じように内容がユーモアをもつだろうが、楽器で演奏された音の配列はどのようにユーモアをもつのか。また、そのユーモアはどう鑑賞されているのか。

本発表は、知覚と情動に関する哲学的観点から、音楽のユーモアとその鑑賞を検討する。そのために本発表は、レッド・ツェッペリンの《デジャ・メイク・ハー》を取り上げる。

ユーモアが何であるかに関していくつかの見解があるが、哲学や心理学で最も有力視されている立場によると、ユーモアは、期待と現実との不一致である (Caroll 2014; Hurley et al. 2011)。そして、《デジャ・メイク・ハー》は、ハードロックバンドの代表格であるレッド・ツェッペリンが作ったレゲエ調の曲であり、ツェッペリンに期待される楽曲と一致しないものとなっている。その点でこの曲はユーモアをもつと言えるだろう。

だが、音楽に限らず、ユーモアはすべて、それを理解できる人とできない人が分かてくる。もちろん、《デジャ・メイク・ハー》についても、こうした理解のばらつきがある (Gracyk 2013)。では、なぜばらつきが生じるのか。それを説明するために、本発表は、情動の対象と知覚的カテゴライズに関する考察を行う。

まず注目したいのは情動である。先ほどユーモアは不一致だと述べたが、ユーモアは滑稽なおかしみ (comic amusement) という情動の対象だとも言われている (Caroll 2014)。

だが、「情動の対象」には二通りの意味があることに注意しなければならない (Prinz 2004)。たとえばクマに遭遇して恐怖を感じる場合、その恐怖は、目の前のクマを対象としていると言える。他方で恐怖は、クマだけでなく毒ヘビや強盗に遭遇したときにも生じる。これらに共通するのは「身の危険をもたらす」という特徴である。こうした意味で、恐怖の対象は身の危険だと言うこともできる。そのため、「クマが怖い」という状況では、目の前のクマが恐怖の対象になっているとも、クマがもたらす身の危険が恐怖の対象になっているとも言えるのだ。前者は情動の個別的対象と呼ばれ、後者は情動の形式的対象と呼ばれる。

そして、情動の個別的対象を認識したとしても、形式的対象も認識できるとは限らない。たとえば、触るだけでも危険なヤドクガエルを見た場合、ヤドクガエルを知っている人は恐怖を感じるが、知らない人は綺麗な見た目にポジティブな情動を感じるかもしれない。

これと同じことが滑稽なおかしみにも言えるだろう。色々な個々のジョークがユーモア

をもつが、そのユーモアである不一致は、滑稽なおかしみの形式的対象だと考えられるのだ。そして、ユーモアを理解できていない人は、個々のジョークという個別的对象は認識できているが、形式的対象である不一致を認識できていないと考えられるのである。

個別的对象の認識と形式的対象の認識の乖離という点は、すでに述べたように、ジョークにも当てはまるだろう。そこでは発言の内容が不一致を生み出す。では、音の配列である音楽の場合はどうなっているのか。ここで本発表は、芸術鑑賞における知覚的カテゴリーに焦点を合わせる (Walton 1970; 源河 2015)。鑑賞者は、個々の芸術作品を特定の知覚的カテゴリーのもとで鑑賞しており、カテゴリーが変われば作品に対する評価が変化する。たとえば、キュビズムという手法を知らない人がピカソのキュビズム絵画を一般的な絵画カテゴリーで知覚した場合、その絵画に対して誤った評価を下してしまうだろう。

本発表は、これと同じことが《デジャ・メイク・ハー》の鑑賞にも起こっていると主張する。すでに述べた通り、《デジャ・メイク・ハー》はレゲエ調の曲であるが、それはレゲエカテゴリーで鑑賞されるべきものではない。むしろ、ハードロックバンドの代表格であるレッド・ツェッペリンが作った曲である限り、ハードロックカテゴリーで鑑賞されるべきものである。しかし、曲自体はレゲエ調であるため、ハードロックカテゴリーでそれが知覚された場合、そこにハードロックとの不一致が見出される。本発表は、それこそが滑稽なおかしみを喚起するユーモアだと主張する。他方で、レゲエカテゴリーで《デジャ・メイク・ハー》を知覚した人は、《デジャ・メイク・ハー》という個別的对象は認識できているが、不一致という形式的対象を認識することができず、滑稽なおかしみを感じない。このようにして、音楽のユーモア理解にばらつきが出てくると考えられるのだ。

Carroll, N. (2014) *Humour: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.

Gracyk, T. (2013) *On Music*, Routledge. (セオドア・グレイシック著, 源河亨・木下頌子訳, 『音楽の哲学入門』、慶應義塾大学出版会、2019年.)

Hurley, M, et al. (2011) *Inside Jokes: Using Humor to Reverse-Engineer the Mind*, The MIT Press. (マシュー・ハーレーほか著, 片岡宏仁訳, 『ヒトはなぜ笑うのか: ユーモアが存在する理由』, 勁草書房, 2015年.)

Prinz, J. (2004) *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*, Oxford University Press. (ジェシー・プリンツ著, 源河亨訳 『はらわたが煮えりかえる: 情動の身体知覚説』, 勁草書房, 2016年.)

Walton, K. (1970) "Categories of Art", *Philosophical Review* 79: 334-67. (ケンダル・ウォルトン著, 森功次訳, 「芸術のカテゴリー」、電子出版物, [url=<https://note.mu/morinorihide/n/ned715fd23434>](https://note.mu/morinorihide/n/ned715fd23434).)

源河 亨 (2015) 「芸術鑑賞と知覚的カテゴリー」, 小熊正久・清塚邦彦 (編著) 『画像と知覚の哲学: 現象学と分析哲学からの接近』, 190-204.